

東アジアの海域世界と日本

日本の古代国家と東アジア

縄文時代の日本列島の住民は、各地に小さな集落をつくって、動物や魚をとり、野生の植物を採集する生活をおくっていたが、紀元前4世紀ころに大陸から稲作や青銅器などの金属器が伝わり、人びとの生活は大きく変化した(弥生時代)。農耕がひろまり、人口がふえるとともに、大小の集落が争いをつうじて統合され、数世紀をかけて日本という国のまとまりが形づくられた。

紀元1世紀には九州の小国の一つである奴の国の国王が漢に使いをおくり、また3世紀には邪馬台国の女王卑弥呼が魏に使いをおくった。その後、4～6世紀の古墳時代は、中国では分裂と動乱の時代だったが、このころに漢字や儒教の経典、土木技術、仏教などの大陸文化がおもに朝鮮半島経由で日本に流入した。隋・唐が中国を再統一すると、大和政権は、遣隋使・遣唐使を派遣して、中国にならった中央集権的な国家制度を整備した。同じころ、朝鮮半島やチベットでも唐の制度を取り入れた国家が成立する。

宋・元時代の東アジア

7～8世紀には唐をつうじてイランやインドの要素をもふくむ国際的な大陸文化が日本に流入し、奈良時代の天平文化を形づくった。しかし平安時代にはいり、9世紀の末には中国の政治的混乱もあって遣唐使は廃止され、日本独特の文化や社会体制が成熟してくる。天皇の名のもとで有力貴族や武士が実質的な政治権力をにぎる制度や、和歌・大和絵のような国風文化がそれである。漢字をもとにして、日本語の音を直接にあらわす仮名もつくられた。宋の北方にいた遼や金などの遊牧民族が、漢字を基礎に独自の文字をつくるのも、同じころである。

10世紀以後、中国大陆では北方遊牧民が優勢となり、宋を圧迫した遼や金につづき、13世紀にはモンゴルが中国を征服した。日本ではそのころ武士の力が強まり、12世紀末には鎌倉幕府が成立した。この時期、日本と中国との政治上の正式な関係は弱まったが、民間の交流はむしろ活発化し、東アジアの海域では、陶磁器や銅銭などの貿易や僧侶の留学がさかんにおこなわれていた。

倭寇の時代

14世紀後半に成立した明は、日本の室町幕府や琉球王国・朝鮮、および東南アジアの多くの国ぐにとのあいだに積極的に朝貢関係を結び、民間の中国人による海上貿易を禁止した。明は、当時朝鮮・中国沿岸で活動していた海賊(前期倭寇)をおさえ、朝貢制度によって東アジアの海域世界を統合しようとした。

しかし16世紀にはいると、世界的な国際商業の発展の波のなかで、中国沿岸では武装商人団の密貿易が活発化し(後期倭寇)、明の統制力は弱まって、中国・日本やヨーロッパの商人たちが激しい競争をくりひろげる。16～17世紀の鉄砲伝来・南蛮貿易・朱印船貿易など、日本史上でもまれにみる対外交流の発展は、このような東アジア全体の激動を背景としている。国内統一の余勢をかって東アジアを支配しようとした豊臣秀吉の朝鮮侵略も、その一つの現れである。この動乱のなかで成長し、支配をかためた中国の清朝や日本の江戸幕府が、約200年の平和な時期をへて、19世紀の西洋の進出をむかえることとなる。

(30頁～31頁)

東アジアの海域世界と日本

＜日本の古代国家と東アジア＞ 日本列島に住む人びとの存在は、漢の時代に中国に知られるようになった。紀元1世紀には九州の小国の一つである奴の国の国王が漢に使いをおくり、また3世紀には邪馬台国の女王卑弥呼が魏に使いをおくった。その後、4～6世紀の古墳時代は中国では分裂と動乱の時代だったが、このころに漢字や儒教の経典、土木事業、仏教などの大陸文化がおもに朝鮮半島経由で日本に流入した。隋・唐の中国再統一とともに、大和政権は唐の中央集権的な制度をとりいれて支配をかためた。同じころ、朝鮮半島やチベットでも、唐の制度をとりいれた国家が成立する。

7～8世紀には唐をつうじてイランやインドの要素をもふくむ国際的な大陸文化が日本に流入し、奈良時代の天平文化を形づくった。しかし、日本が積極的に大陸文化を吸収しようとした時期がすぎて9世紀の末にいたると、唐代末期の政治的混乱もあって、大陸文化の直輸入ではない日本独特の文化や社会体制が成熟してくる。天皇の名のもとで有力貴族や武士が実質的な政治権力をにぎる制度や、和歌・大和絵のような平安時代の国風文化がそれである。漢字をもとにして、日本語の音を直接にあらわす仮名もつくられた。宋の北方にいた遼や金などの遊牧民族が、漢字を基礎に独自の文字をつくるのも、同じころである。

＜中世日本と東アジア＞ 10世紀以後、中国大陸では北方遊牧民が優勢となり、宋を圧迫した遼や金につづき、13世紀にはモンゴルが中国を征服した。日本ではそのころ武士の力が強まり、12世紀には鎌倉幕府が成立した。この時期、日本と中国との政治上の正式な関係は弱まったが、民間の交流はむしろ活発化し、東アジアの海域では、陶磁器や銅銭などの貿易や僧侶の留学がさかんにおこなわれていた。

14世紀に成立した明は、日本の室町幕府や琉球王国・朝鮮、および東南アジアの多くの国ぐにとのあいだに積極的に朝貢関係を結び、民間の中国人による海上貿易を禁止した。明は当時朝鮮・中国沿岸で活動していた海賊（前期倭寇）をおさえ、朝貢制度によって東アジアの海域世界を統合しようとしたのである。15世紀の初めに統一された琉球王国は、この朝貢制度を利用して、中国と東アジア・東南アジア各地とを結ぶ中継貿易で繁栄した。

＜東アジアの動乱と近世日本＞ しかし16世紀にはいと、世界的な商業発展の波のなかで、中国沿岸では武装商人団の密貿易が活発化し（後期倭寇）、明の統制力は弱まって、中国・日本やヨーロッパの商人たちが激しい競争をくりひろげる。16～17世紀の鉄砲伝来・南蛮貿易・朱印船貿易など、日本史上でもまれにみる対外交流の発展は、このような東アジア全体の激動を背景としている。国際交易の利益や新しい武器は、東アジアの新興勢力の出現をささえた。国内統一の余勢をかって朝鮮を侵略した豊臣秀吉もそのような新興勢力の一つである。この動乱のなかで成長し、支配をかためた中国の清朝や日本の江戸幕府が、約200年の平和な時期をへて、19世紀の西洋の進出をむかえることとなる。